

2003年

1月5日 東京新聞

1月26日 西日本新聞

小説より奇なる事実 徹底的な検証で

〈民主〉と〈愛国〉

戦後日本のナショナリズムと公共性

小熊英二著(新曜社・六三〇〇円)

トルストイの『戦争と平和』はナポレオン戦争を背景にした世相が詳細に描かれており歴史資料としての価値も高いが、トルストイ自身が生まれたのは、ナポレオン戦争の三十年後である。いわば、戦争を知らない世代であったトルストイだからこそ、歴史に対する公正な立場をとることができたのかもしれない。

『〈民主〉と〈愛国〉』は大東亜戦争も焼け跡も経験していない私と同時代の歴史家小熊英二による「戦争と平和」である。小熊英二は、戦中、戦後を生きた政治家、知識人の



みならず兵士や市民の心情から歴史を浮き彫りにしようとする。戦中戦後に人々は何を考え、いかなる発言をしてきたか、その検証は徹底しており、今後戦後史を素材に小説を書こうと思う者には、ディテールが緻密なソフトウェアが与えられたように心強い。ここには小説よりも奇なる事実が無数にちりばめられている。

歴史観や政治的立場の主張を目的とした歴史記述は、事実の選別と排除が前提になっている。個々の心情は国民感情といった曖昧な言葉のトリックに回収されてしま

評者・島田 雅彦(作家)

度差があった。知識人は戦中に書いたものの内容によって、戦後に断罪されたり、大政翼賛に与したことで自己嫌悪に駆られたりした。彼らはそのトラウマを引きずり、自ら反省することから、戦後の言論を形成していったし、市井の人々や農民たちを軽蔑しながらも、彼らの声をおのが思索に反映させながら、新たな思想を練り上げてゆくしかなかった。戦後の言論の多様性は戦後民主主義の欺瞞とか、曖昧な日本とか、敗北の美学などといった安易な言葉ではくれない。

◇ おぐま・えいじ 一九六二年生まれ。慶応大学教員。